錬金術のジェネラリスト

深琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
錬金術のジェネラリスト

【Ｎコード】
Ｎ４２３４ＢＡ

【作者名】
深琴

【あらすじ】
両親が残してくれた店を手放さない為、助けてくれた人たちの為にも錬金術師になりたい！
異世界ファンタジー物です。トリップや転生ものではありません。
異種族として定番エルフ・ドワーフ等も出します。魔法ももちろん？
青年の成長物語・・・・になるといいなぁと思いつつ。
初めて書く為稚拙な分でありますが、楽しんでもらえたらうれしいです。しばしのお時間をいただきつつ、これから頑張っていきたいと思います。

プロローグ

「よーし。これで明日の資格試験の準備は大丈夫のはずだ」

明日の実地試験の為の必要装備・回復アイテム等を、リストと照らし合せながら確認を終らせる。

「この3年なんとか生きて行けたけど、これから先は自分の手に技術をもたないとやっていけないもんな・・・」

今年で数え年１８になるテール・アルフォンスは錬金術師の卵である。

錬金術師はポーションから剣の作成等を総合的に開発・販売する職であり、最高峰の資格ジェネラリスト資格試験には毎年多数の応募者がでるのだが、合格者がここ１００年で1名という超難関な職である。

「さてと準備の確認も終ったし、早めに寝て体力を温存しようかな～と」

待ちに待った錬金術師になる為の資格試験を目前に控え、逸る気持ちを抑えるのも難しいもので布団に入ったのだが中々寝付けない・・・

「眠気がくるまでちょっとこの時代の事とか振り返ってみよう」

ここアストレール大陸にある一つの街、ここジェイラルは北は人が登れないだろう山があり周りを森に囲まれ魔物が多く生息し、街を

作るにはいささか難しい場所であった。
西には川を挟んで首都イラヘールのあるテンドレンタル・南は海に面しており、東には山を隔てて今は休戦状態の戦闘国家とされるオーリスがある。
その微妙な場所に皇帝直属の名誉近衛騎士オウリンが、引退と共に褒美としてこの地を賜り、開拓して小さな村を作ったのが始まりである。
街中央に銅像が建っているのは当たり前かもしれない。この周りは子供たちの遊び場としていつもにぎわっていて笑い声がたえない。
過去戦争を起こした戦場の中央に存在しているジェイルスでその当時の戦死者達は何を思うだろう？
テンドレンタルとオーリスは過去何度と無く衝突しているが、オウリンがこの街を起こして以来休戦状態が暗黙の了解となっている。

その場所に強さや富を求めて冒険者が集まり始め、商人が行商をしにこの地を訪れ建物が建ちという具合に少しずつ大きくなっていった。

今では数多くの冒険者の拠点として１００年間栄えている街であり、その為各施設（宿屋・武器屋・道具屋・鍛冶屋・魔法雑貨屋・）等が所狭しと並んでいて各々が切磋琢磨しているにぎやかな場所。
街の運営は開拓者オウリンが独裁政治を善しとせず、クラン（商工会議所）が各１名ずつ代表者を募り合議制を敷いてる街であり、街自体には大きな諍い（いさかい）もなく少しずつ発展してきた。

テールはその街で１９年前に産声をあげた。両親は錬金術師の父親と冒険者の魔術師の母親で愛情を持って育てられすくすく成長していった。
小さな万屋を営む父親の工房が遊び場であり、自然と錬金術師になろうと将来の希望をもっていた。

しかし１５歳の時、材料調達の為に両親が出かけて行き、そのまま消息を絶ってしまった。
テールは帰りをひたすら待ったが、１ヶ月の捜索の甲斐も無く捜索終了宣言と共に両親の死亡確定が通知された。
遺体の無い葬儀に数多くの慰問者が訪れ、父が母が街の人達に愛されていたのを肌で感じた。
うれしい感情があるとともに、自分も街の人の役に立ち愛される立場になりたいと純粋に願ったのもこの時であり、テールとしての生き方の出発点になってると考えている。
まずは錬金術師として一人立ちするのが今の目標であり将来的にはジェネラリストをめざそう！という希望を密かに考えている。
１５－１７歳までは両親が残してくれた財産と魔物を狩って材料を売り払らいながらほそぼそと生活し、限られた時間ではあるが許される限り勉強もやってきた。
助けてくれた周りの人々に感謝しながらの生活で、小さな工房を手放すことなく明日を迎えられそうだ。

「父さん・母さん。俺頑張るから、明日の試験合格するから」

Ｚｚｚ・・・・

静かに夜が更けていく

翌日～試験開始（前書き）

さてさてドワーフさん等の異種族を登場させようと思います。
ゆっくりなので先に中々進まないですがご了承の程を・・・

翌日～試験開始

チュンチュン　　チュンチュン

「ん・・・・・・」

小鳥のさえずりで目を覚ます。しかし今日は何でこんなに早く目覚めたのか疑問がでてくる。
昨日はいつの間にか寝ていたみたいだけど、寝覚めは思ったほど良くない。
もぞもぞと布団から起き上がろうとするがボクはすごぶる朝が弱いだ。

「もうちょっとだけ寝かせて」

誰も起こすものの居ない部屋で一人言葉を発する。このまどろみは至福のときだよねぇと、意識を手放そうとする自分がいた。
ふと時計が目についた。寝ぼけたままの頭でぼんやりと見てみると、８時をさしていた。

「８時かぁ。だいぶん早く目が覚めたな。何でこんなに早く目が覚めることってないのにな」

問題発言である。今日は何の日かすっかり忘れているテール。

「って今日は試験があるから起きないとだめじゃないか！」

とたんに意識が覚醒する。この１８年間で初めて早く起きたかもしれない・・・・。

試験開始時間は１０時からだから着替えて・朝ごはん食べてたら時間足りないかも・・・・・。
「まずい。すぐ支度しないと！！」
あわてて井戸まで駆けつけ井戸水で顔を洗い準備に追われる羽目になる。

装備類は昨日のうちに準備していたのが幸いだった。確認までの時間は自己最速だったことはいうまでもないかも。

「あいつはなにやっとるんじゃ！試験時間の３０分前には到着しとけというたのに！！！」

試験官のドワーフのレンドルフは、イライラしながら試験会場であるイレーヌの森の入り口に仁王立ちしていた。

レンドルはこの街でテールの万屋の隣で鍛冶屋を営み、評議会メンバーの一人でもある人物でもある。簡単に言えば重鎮ですね。齢４００歳を越える元気なおじいちゃん。（本人に言えばハンマーで追いかけられる事請け合い）
ドワーフ・エルフ・精霊等の幻想種族は少数民族ながらここアストレール大陸で生活の基盤を作っている。人よりもはるかに長い寿命を持つ種族たちであり、基本隠れ里で生活して人との関わり合いを持っていなかったが、１００年の間に好奇心の強い者達が人と一緒に生活するようになっていた。
このドワーフのレンドルも３０年前に好奇心に勝てず、ここジェイラルにて生活を始めた変わり者でもある。

「はぁはぁはぁ・すいません～。遅れました」

息を切らせながらテールが走ってくる。髪はぼさぼさで寝癖まで装備している。完全に寝坊だとばれる仕様である。

レンドルフのこめかみに怒りマークが浮かび上がる。イライラの沸点が最高潮。

「このばかもんが～～！大事な日だというのにお前というやつはーーーー！！」

「そんなに怒ると血管が切れますよ」とは心の中でおもうだけのテールである。言葉にだしたらミンチにされるかもしれない（泣き）。

「たくお主の将来がかかってる試験じゃろうに、これで遅刻なぞしておったらそれこそ路頭にまようところじゃぞ」

「ご・ごめんなさい。反省します・・・」

しょぼ～んとするテールを見てレンドルフも溜飲を下げる。

「反省もしておるようじゃし、試験内容をいうぞ！。」

「はい。よろしくおねがいします」

「本当はダンジョンに入ってもらう予定じゃったが、崩落があっての。イレーヌの森に変更となった。課題は鉱石の発見とそれに伴う武器製作が課題じゃ。お前も錬金術師の卵じゃから鉱石発見の特殊スキルはもっとるじゃろ？それを今回は使って埋めてある鉱石を見つけて、錬金を行なう。簡単じゃろ？

ただし！鉱石は下級・中級と埋めてあるものは様々じゃ。どれだけ

目が肥えてるかも課題じゃからしっかりな」

「ふむふむ。まずは鉱石発見を使い鉱石を探し出すと。それで鉱石は良い物・悪い物があって、しっかりと吟味しないとだめと言うこと。最後に錬金で剣を作製して課題提出でいいのか」

声に出しながら確認をこめてレンドルフの目を見る。間違いはなさそうかな。

「そろそろ時間じゃ。しっかりな。ではこれから試験を始める開始！」

開始の合図を聞き深呼吸をしてイレーヌの森に入る。この森は弱いながら魔物もいる。初級者の冒険者の腕試しや駆け出しの人用みたいな場所だ。自分もだいぶこの森に通い詰めた経験があるので、魔物の種類などは把握しているはず。ちょっと自信ないけどね・・・。

開始から１０分辺りで止まり辺りを見回す。魔物の気配は今の所ないみたいだ。ここで一度調べておくのが正解かもしれない。

「サーチ」

錬金術師の固有スキル鉱石発見を使ってみる。魔法と呼ばれる神の啓示。その身に魔力を保有するものはこの世界には多く存在する。魔法は生活には欠かせないありがたい存在なのだ。

戦争の道具にもされてるから特にソーサラー（魔術師）の需要は高い。

自分自身も母親の血を受け継いでいる為、少なくない魔力をこの身にやどしている。実感は使うまではなかったけどね。

ぽぅと赤く光る物が１点あるのを確認する。ここ半径１０ｍ以内に

はその1箇所のみみたいだ。

「赤色か・・・。あんまり質のいい鉱石じゃないかな」

このサーチの特徴としては質の良い鉱石は発光する色が変わる。金＞銀＞青＞緑＞黄色＞赤という具合に。

錬金術師の固有魔法である為、自分にとっては役に立つというかこれしか使えないんだけどね・・・

「時間はまだあるし範囲を広げてもっと奥までみてみよう入り組んでて最奥はむずかしいかもだけど・・・」

独り言を言いながら奥へと進む。もちろん魔物は何時来るかわからないので警戒しながらだけど、これがまた大変きつい。集中力がどこまで持つのかが勝負の分かれ目かもしれない。

草を掻き分けながら、たまに調合に使える野草や実を見つけては確保していく。鉱石みつけろよ・・。

「お・黄色の反応があるな。これがいいかも」

少し反応は弱いけど、見つけた鉱石の中ではだいぶましな部類に入ると思う。

「ここまでかかった時間はっと・・・。げ・1時間越えてる。錬金に時間取りたいしこの辺りでやめておくかな」

ふと頭の中によぎるものがある。本当にこの程度の鉱石で良いのかと。本当にこれで良いのかと。

「だめだ。これで満足してたらその程度で終ってしまう。僕はその先を見据えているんだろう・・・。納得するまで探さなきゃ」

そう思いなおして再確認する。まだ時間はある！と。時間の許す限り探索に費やすぞ。

タイムリミットまで後3時間・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4234ba/

錬金術のジェネラリスト

2012年1月11日08時55分発行